



宗祖 法然上人 800回大遠忌

通信

法然上人800回大遠忌記念
法然上人と今、すべてのいのち
（後見人） 浄土宗西山禪林寺派 総本山永観堂禪林寺



平成23年4月25日(月)～5月1日(日)
総本山 永観堂禪林寺

遠忌を見据え、宗派の未来を拓く

御影堂の屋根葺き替えが完成し、大遠忌を待つ

法然上人800回大遠忌を記念して、昨年十二月より進められていた御影堂の屋根葺き替え工事は、この十月に完成し、足場も取りはずされました。大殿屋根の総面積は、一四三二・九四平方m、使用された瓦は全部で約四万四

千枚。本格的な棧葺き耐震工法で、総葺き替えが行われました。

美しい聲の波を見せ、法然上人をおまつりするにふさわしい大屋根となりました。来たる平成二十三年の四月には、この御影堂で宗祖法然上人800回大遠忌がとめられます。このように阿弥陀堂とあいまって、大遠忌の準備が着々と確実に進んでいます。

色鮮やかに天女の舞や龍

大阪四天王寺から移築された阿弥陀堂は、極楽浄土を思わせる彩色が堂の内外全体に施されていました。四百年ほどの間に、ほとんど消えてしまい、法然上人800回大遠忌の記念事業として、京都府文化財保存の専門家の指導によりその復元に取り組んでいます。

川面美術研究所の協力により、飛天、迦陵頻伽、瑞鳥、龍、虎、亀など、ひとつひとついいねいに彩色され、柱には截金の技法も用いられ復元されています。

頭貫、長押、紅梁、鴨居など極彩色の文様で描かれ、その中のみかえり阿弥陀さまが立たれると、あたかも極楽浄土にいるかのような世界を創造します。



屋根が葺き替えられた御影堂



精密な復元がなされる天井部分



天女の舞



龍

「法然上人と今、すべてのいのち」岐阜大会

舞台も観客も一体となつて、「南無阿弥陀仏」で法悦の世界へ！

平成二十年十月三日（金）、岐阜県の羽島市文化センターにおいて、法然上人800回大遠忌記念「法然上人と今、すべてのいのち」岐阜大会が開かれました。「みのぎくホール」をうめつくした四百人の聴衆は、今に生きる法然上人の教えに心うたれ、法悦の世界に浸りました。

念佛信仰あふれる聴衆で満席

秋らしい好天に恵まれ、客席をうめた熱心な岐阜の檀信徒さんは、始まる前から今か今かと待ちわびている。開幕に先立ち、津島市宝泉寺住職伊藤信道師の指導のもと「二枚起請文」の練習が行われました。ついで、舞台と観客が一体となるように設計され、音響面でもすぐれた最新設備を誇るこの「みのぎくホール」に、永観堂の梵鐘が鳴り響く。「ゴーン、ゴーンゴーン」鐘三打。幕が開き、舞台中



「特別法要」の練習風景

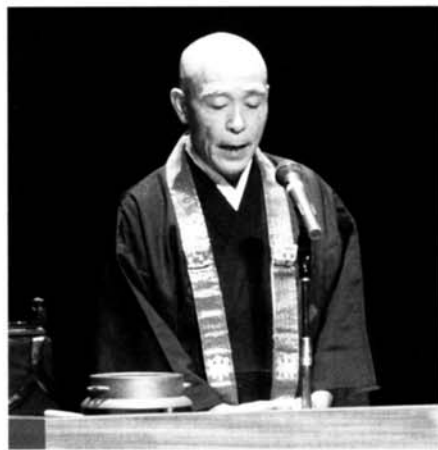
央の名号にスポットライトがあたり、上手に法然上人像が映し出される。

アナウンサーの柏木宏之氏が登場して開会宣言して岐阜大会が始まりました。

佛さまにおまかせする心を

宗派を代表して鬼頭誠英宗務総長が
つぎのように挨拶されました。

「法然上人は八十年のご生涯でしたが、ご一生の半分以上を求道に捧げられました。四十三歳まで悩まれたのですが、四十三歳のときに、お念佛の教えに出会われた。それ以降法然上人からは知恵、慈悲の強力な力が発揮され、法然上人の考えられること、お話しされること、ちょっとした振る舞いによってまわりの人々が感化された。法然上人のお姿を見、言葉聞いた人は非常に歡喜に包まれ、称名念佛しながら吉水の草庵を辞去したと



鬼頭誠英宗務総長の挨拶

をまかせておけば、そういう気づきがおこり、苦しみ、悩みの根源が見えてくる。それはすべて阿弥陀さまのはからいにはかならないとお示しになった。どうぞ、宗祖法然上人800回大遠忌に向けて、ますます信心増進してくださいませことを念じ挨拶いたします。」と開会の辞をのべられました。

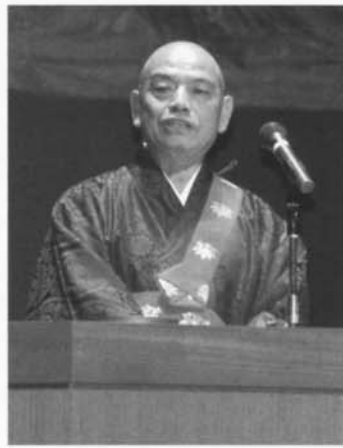
よろこんで生きる努力を

最初の法話は、京都市恵光寺住職の岸野亮淳師が「よろこんで生きる努力を」と題してお話しになりました。

「法然上人さまは、岡山の美作の誕生寺で武士の子としてお生まれになりました。名前を「勢至丸」といい、お父様が殺されてしまう。殺された時に、お父様は「敵はとるな、これ宿世の因縁と思ひ、わが菩提を弔え。」という遺言をされるの

いう。法然さまは、凡夫はもっている力が限られているから、佛さまのお力に自他ともに頼ることを勧められた。浄土門は限られた力を限られていると知り、まぢがいまぢがいと自覚することです。その自覚は自分ではおこすことができない。お念佛を申しているあいだに、そういう気づきが自然におこる。お念佛に身

ですね。上司でありました預所（あずかりどころ）明石定明（あかしさだあきら）とお父様の漆間時国（うるまときくに）は押領使（おうりょうし）と言って警察署長のような仕事ですが、この二人の間に確執があったと見えますね。それが原因で法然上人のお父様は多分いずれこのときが来るであろうということを用意しておられたにちがいない。宿世の因縁、これは私自身がつくったものであるのか。おまえは出家していけという遺言だったろうと思います。



惠光寺住職の岸野亮淳師

比叡山に登って、学問し、修行してゆく若い法然上人にとって、あの父親の遺言は何だったのだろうか。飢饉がおこり人々が暗い生活をしている時代を見ながら、ほんとうの彼岸は何かということをお父様の課題として、比叡山に入られたことは、想像に難くはありませんね。比叡山の佛教は栄誉・栄達のために、お坊様たちが勉強している。そういうところまで変化をしていたと見えます。そのとき法然さまは、これは、ほんとうに佛教かしら。

ほんとうに、この比叡山の佛教で救われていくのだろうか、という思いは強かっただろう。ということで、法然上人は比叡山を辞去していかれます。

法然上人さまは、市井の一般の河原乞食と呼ばれる人たちも平等に救われていくことこそ真の佛教であると考えられました。

お釈迦さまのたくさんあるお経のなかで、「法句経」というお経があります。四百二十三の短いお経で構成されています。そのなかの百八十二番。「人に生まるは難く、いま命あるは有難い。世に佛あるは難く、佛の教えを聞くは有難し」。わたくしたちが人として生まれてくるのは、不思議な存在です。ありがたい。数えきれないご縁で、この世に生まれてきて、お釈迦さまの教えに出会うことができた。これも不思議なありがたいことです。このありがたいということとは、「あることがむずかしい」というところからきているのです。わたしたちのまわりは、わたしたちを育ててくれるものでできています。今日わたしを支えているのは、わたし以外の命、ほとんど見えない命がわたしを支えているということに、ありたいという考え方があり、お釈迦様の時代からでてきた。法然上人さまはその辺のことを大事に思われ、ひじょうに人間的な佛教を求められたというふうに言えますね。近年の詩人で坂村真民さんという人がいらっしやいます。その人の詩に

『五弁の花はいつも五弁で ひとつの狂いもない この不思議 この神秘 ここに宇宙の真実がある わたしはこの真実をわたしの信仰としよう』とあります。

法然上人さまは一生懸命求めていかれる。どんな人も、武士であろうと、貴族であろうと、平等に月の光に浴し、太陽の光に浴し、水もいっしょにいただいで、尊いいのちを生きる。そういう生き方を求められて、とうとう最後は、この不思議のいのちを生きていることがありがたいし、これがうれしいことである、喜びであるというふうにまで昇華された方なんです。法然上人はその喜びの心を、み佛としか言えないような大いなる力として、「南無阿彌陀佛」というふうに手をあわしていかれた。それが僚原に火が広が

るように、念佛の教えが日本中に広まったといえるわけです。

最後に竹部勝之進さんの詩を紹介して「ありがたいこと 木は木でよかった 石は石でよかった わたしはわたしでよかった ありがたいこと」ご静聴ありがとうございました。

法然上人のお心

続いて、京都市帰命院住職江口隆泰師が、「法然上人のお心」と題して、お話になりました。

「いつでも、無欲無心で手をあわしましょう。無欲無心で一言のお念佛、南無阿彌陀佛がいただけるようになっていただけたらありがたいと思うんです。手を合





婦命院住職の江口隆泰師

わすこと、一声のお念佛がなかなか申せない。法然上人さまの八百年前と今日とは、世相が変わっています。八百年前はどの人もこの人も、お念佛と法然上人さまのみ教えが、心のよりどころです。ところが今日は、心のよりどころが変わっています。おれが、おれがという自我がお念佛をできないようにしています。だからわたくしどもは、しっかりお念佛をいただいでいくということを心に自覚しますならば、罪びとの自覚、地獄一定のわたくしなんだという心の底からの懺悔があれば、そこにお念佛が静かにいただけると思うのです。どのひとも、山あり谷ありの人生です。時には、わが行く道さえきわまったという場面に出合わせられていただくときに、佛法、経文によって、心を育て上げていただくのが法然上人さまのお心ではないかと思えます。今年の

七月二十五日、わたくしの檀家様で六十五歳のご主人が亡くなられた。お葬式を済ませ、七日七日のお速夜をお参りさせていただいているとき、奥さまが「和尚さん、すしお話をさせてくださいたいよろしいでしょうか」とおっしゃるので、「けっこうです。」と答えると、「実は、七月十日、おじいちゃんの命日にお参りしていただいたときに、主人が隣の部屋で寝ておったのです。いつもは、二階でやすんでおるんですが、今日は和尚さんがお参りにきてくださるから、佛壇の横で寝かせてくれと言いますので、一階で寝ておったのです。」そうですか。そうとは知らず大きな声でおつとめして申し訳なかった。「いやいや、けっこうです。いま和尚さまが帰られましたよと言って枕元へいきますと、主人が「お経を聞かせていたでいて、これで心が落ち着いた。」と言って涙をぼろぼろこぼしながら、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と言うのです。そして、自分の腕をなでながら、「敏江、ながいこと世話になってすまんだな。もうおれは余命いくばくもない。どうか、俺が死んだときには、氣丈に喪主を務めてくれ。そして、俺が死んでいくことは母親にはだましとおしてくれ。母親が知れば半狂乱になるのはわかっているから。」と言って、二週間後の七月二十五日にお浄土へ還って行かれた。私は連夜のときに、それを聞かせていた

勤行式による記念特別法要



れたなあ、と感心しました。そのとき奥さまから、一枚のはがきを見せられました。こういうことが書いてある。

『唐突でございしますが、まもなくお浄土に還らせていただきます。もう園部達夫六十五歳は肝臓動脈瘤瘍のために、この世にお別れしていきます。』

昨年十一月にがんの宣告を受けたときは、科学的な治療をいっしょうけんめい施してきましたが、それもこれもまにあいませんでした。京都の都ホテルを退任後、京都、大阪、神戸の三つの大学で教べんをとっておったときは、順風満帆の日でございましたが、人生の禍福は糾える縄のごとし。もうお浄土に還れる。三つの大学に辞表を提出したときは、もう私の人生最後の止終。ありがとうございました。どうか、みなさん、後に残った妻敏江を何分ともよろしくお願い申し上げます。旅立っていきます。『そういう

うはがきです。』
なんとという素晴らしい人生を送られた

のでしょう。人が生きるといふことはどういふことか、死んでいくといふことはどういふことか、ということをしつかり学びあげられた六十五年の人生でございませう。わたくしどもは、いつどこでおいとまをいただいても還らせていただく世界がある。息切れ、まなこの閉じしだい、安養浄土の初日の出。ちゃんと佛さんの世界に還らせていただけるのだという確信を心の中に育てていただくことをお願い申し上げます。』

心ひとつに南無阿彌陀佛の世界へ

浄土宗西山禅林寺派管長総本山永観堂禅林寺法主小本曾善龍院下を中心に随僧、侍者、法事部、十四名が舞台中央に整然と居並び、「勤行式」による記念特別法要がつとめられました。

「願我身浄如香炉」とゆつたりとして抑揚のある節回しで唱えられると、会場は荘厳な雰囲気につつまれ、記念大会にふさわしい勤行がくりひろげられました。





小木曾善龍祝下の御親教

お勤めの後、「御親教」で、小木曾善龍管長は次のように述べられました。「わたしたちは、佛さまのおはからいによって、この世に生まれさせてもらった。そして、如来さまのご本願に会わせてもらって、自分の力では参ることができない極楽世界へまいらせていただく。こんなもったいないことはありません。だから、南無阿弥陀佛なのです。法然上人さまは、うれしいから、ありがたいから、もったいないから、南無阿弥陀佛と唱えよと教えてくださった。以来、今日まで八百年、日本の津々浦々まで念佛をいただいて、私たちは幸せに生活させていた



琵琶で語る古屋和子さん

だいています。皆さま、どうぞ念佛を忘れないようにお願いします。」とお話になってお十念を唱えられると、会場の全員の心もひとつになり、南無阿弥陀佛の世界に入りました。

舞台と観客とが一体となる

第二部は例によって、古屋節が琵琶の音にのって、とうとうと流れる。「祇園精舎の鐘の声」で始まり、勢至丸の誕生から、父漆間時国と明石定明との確執、父の臨終と遺言、母と別れ比叡山へ、比叡山での勉強と心の葛藤、観經疏との出会い、そして法然上人四十三歳、「ただ

南無阿弥陀佛とお唱えなされ。阿弥陀さまは修行もいらぬ、喜捨もいらぬ。ただただ一心に念佛を唱えよと仰せられた。阿弥陀さまは総ての衆生愚痴の凡夫を救うと誓いを立てて下されたのだ。心から阿弥陀さまにおすがりなされ。阿弥陀さまは必ず浄土へと導いてくださる。総てをお任せして、ただ一心に南無阿弥陀佛と唱えればよいのだ。ただ南無阿弥陀佛と、それを聞いた観客の一人が立ち上がり、南無阿弥陀佛、と。またひとり立ち上がり、南無阿弥陀佛、と。つぎつぎと老若男女立ち上がり、十念となる。そして古屋さんの声がかぶさるように「専修念佛は燎原の火のように燃え広がった。」と続き、舞台と観客とが一体となって、南無阿弥陀佛の世界へ導き、最後には入滅の場面で「それから二日後の建暦二年正月二十五日、法然上人は入滅した。」というところで、十人が同時に立ち上がり、十念を唱えました。このように、舞台と観客とが一体となって、この法然上人物語を盛り上げ、成功へと導きました。

一枚起請文でフィナーレへ

満場の拍手がなりやまぬうちに幕が上がり、古屋さんが再び登場。始まるまでに練習した「一枚起請文」を会場全員で合唱。法然上人のご遺訓を一節、一節か



閉会の辞 岐阜県宗務支所長 井上淳龍師

この感動をおもちかえりください

「本日は法話、特別法要、ひとり語りを通しまして、法然上人の御教えに深くふられていただき、お念佛につつまれたすばらしいひと時を過ごしていただけたのではないのでしょうか。この感動を今日の記念品としてお持ち帰りいただければ幸いです。そしてすばらしい記念品を提供していただきました管長祝下をはじめ本山当局、伝道部、法事部、文化部のみならず、ありがとうございました。また、琵琶の弾き語りを聞かせていただきました古屋和子様、ほんとうにありがとうございました。さらに、今日まで縁の下の力持ち的な存在で、大会を支えてくださいました県下ご寺院の住職、寺庭婦人、寺院のかたがたお疲れさまでございました。ありがとうございます。」

伝道の輪が広がるお待ち受け法要

法然上人の教えを胸に、念佛する喜びを未来に伝えようと始まった特別法要・伝道、いわゆるお待ち受け法要は、二〇〇六年六月神戸から始まり、京都、岐阜、愛知、福井、北海道と各地をめぐる、二〇〇八年十二月現在、四十七か寺に及んでいます。

特別法要・伝道心得帳

一、法然上人800回大遠忌記念事業の一つであり、宗門の未来をみすえた事業です。
 一、伝道と法要という二つの柱で、つまり理性と感性とで教線を拡大します。

一、したがって、会処とご縁をいただければ、本山が中心となって行います。
 一、実施にあたっては、本山との十分な打ち合わせのうえ参ります。
 一、綿密なスケジュール管理のうえで実施しますので、時間厳守です。

一、基本的に本山5名、教宣部4名、法事部11名が参ります。
 一、お導師の衣帯は身分相当服を被着してください。
 一、本山から記念品が出ますので、参詣者の数をお知らせください。

さらに、来年は兵庫と但馬の十か寺に参ることが決まっています。

法然上人は「予が遺跡は諸州に遍満すべし。念佛を修せんところは、みなこれ予が遺跡なるべし」とおっしゃっています。全国百か寺をめざして……。

00:00 説教師紹介



00:05 説教 1



00:20 説教 2



00:35 本山より挨拶



00:45 特別法要



01:25 説教 3



01:55 住職挨拶



これまでに実施された御寺院
 二〇〇六年

六月四日 阿弥陀寺
 七月八日 末慶寺・休務寺・積善寺
 七月九日 常楽寺・真如寺
 十月十三日 極楽寺
 十月十四日 法音寺・常林院
 十月十五日 地藏院・浄心寺

二〇〇七年

一月十九日 来昌寺
 一月二十日 立政寺・善光寺
 一月二十一日 寿琳寺・玉泉院
 四月十三日 安楽寺
 四月十四日 安養寺・法榮寺
 四月十五日 竹林寺・安阿弥寺
 七月六日 天性寺
 七月七日 沼貝寺・善光寺
 七月八日 法然寺・善光寺
 十月十三日 安井念佛寺・西寺・寶樹寺
 十月十四日 太秦常楽寺・山ノ内念佛寺

二〇〇八年
 一月十八日 専念寺
 一月十九日 若王寺・西福寺
 一月二十日 稱名寺・中堂寺
 四月十一日 正福寺
 四月十二日 観音寺・護念寺
 四月十三日 西福寺・西方寺
 十月十日 福田寺
 十月十一日 大蔵寺・瑞泉寺
 十月十二日 遊心寺・常福寺

これから実施される御寺院
 平成二十一年
 四月十日 大覚寺
 四月十一日 善導寺・生蓮寺
 四月十二日 善願寺・専浄寺
 十月十六日 長寿院
 十月十七日 延命寺・西光寺
 十月十八日 蓮華院・西光寺



「宗祖法然上人800回大遠忌」記念事業盛り上がる!

順調に進む法然上人を歩く旅

二〇〇六年十月九日、岡山誕生寺を出発して二〇〇八年五月十一日、東加古川まで、百四十一・五キロをすでに踏破しました。第九回は十二月十四日(日) 東加古川から舞子まで二十二・七キロを歩きます。

いよいよ神戸に入り、法然上人の旅も後半にさしかかってきました。さらに山陽道を東進し、西宮から西国街道を通り比叡山に向かいます。

今後の予定はつぎのとおりです。

- 第十回 J R 舞子駅〜J R 六甲駅 二十三・八キロ
- 第十一回 J R 六甲駅〜J R 北伊丹駅 二十一・六キロ
- 第十二回 J R 北伊丹駅〜J R 高槻駅 二十一・五キロ
- 第十三回 J R 高槻駅〜J R 京都駅 二十五・三キロ
- 第十四回 J R 京都駅〜修学院 十二・五キロ
- 第十五回 修学院〜比叡山延暦寺 五・五キロ



来年は愛知大会を実施

「法然上人と今、すべてのいのち」愛知大会は、来年十月七日(水)に開催されます。昨年春には兵庫大会、秋には東京大会と開催され、そして今年十月三日に岐阜羽島市文化センターで開催された岐阜大会で多くの檀信徒に感動をあたえたあのドラマを愛知に持ち込み、愛知の檀信徒の方にお届けしたいと願っています。愛知大会の細部はまだ決まっていますが、大枠はこれまでの大会を踏襲するものと思われ、想定される展開は、永観堂の梵鐘を合図に司会者が登場し、開会を告げると記念大会が始まります。

まず、宗務総長の挨拶で口火が切られると、十五分の法話を二席聴いていただきます。終わると五分間の休憩をとります。つぎに管長祝下と法事部による特別法要を厳修いたします。続いて管長祝下の御親教があり、第一部を終わります。

十五分の休憩後、第二部が始まります。第二部は、古屋和子さんの琵琶で奏でる「法然上人物語」です。四十五分間たっぷり法然上人の一代記を語っていただきます。語り終われば、会場全体で「一枚起請文」を唱和。最後に、愛知県宗務支所長の閉会の挨拶で幕を閉じます。

第二回法然上人への絵手紙募集

「法然上人と今、すべてのいのち」をテーマに、第二回の法然上人への絵手紙を募集しています。昨年も素晴らしい作品がたくさん寄せられました。今年も、あなたの力作を法然さまに届けてください。自分の望み、願い、悩み、主張：なんでも結構です。絵手紙にして送ってください。

はがき大に絵手紙を描き、封書で郵送してください。彩色、画材自由、絵に一言添えてください。

〒住所、氏名(振り仮名)、電話・FAX番号、年齢、性別を明記。なお、応募点数に制限はありません。

賞 最優秀賞(一本) 硯
優秀賞(三本) 墨

佳作(十本) 筆
締切 平成二十年十二月三十一日
発表 翌年二月 入選者へ通知。

応募先 総本山永観堂禅林寺

「法然上人800回大遠忌」事務局



※応募作品の著作権は、主催者に帰属します。

「一枚起請文」の写経を広めよう!

法然上人の遺訓ともいえる「一枚起請文」。口称念佛こそ、本願の念佛にほかならぬことを述べ、また無知なものと同じように、自身を一文不知の愚鈍の身におとし、専ら念佛すべきことを説いています。短い文章ですが、専修念佛の要旨が簡潔に説かれています。この短い文章を一字ずつ写し取って、その精神を心に刻むように写経運動を展開しています。

お子さまでも写経できるように、平かな文のお手本もあり、なぞるだけで写経できる家族みんなで楽しめる写経セットです。回向料も含めて一部千円です。ぜひ、この機会に檀家さんにお勧めください。

写経して本山へ納めていただければ、すべて回向して御影堂の納経所に一年間祀られます。

発行所

宗祖法然上人800回大遠忌記念事業事務局

〒六〇六-八四四五 京都市左京区永観堂町四八

電話 〇七五-七六一-〇〇〇七

FAX 〇七五-七七一-四二四三

Eメール zenrinji@eikando.or.jp

二〇〇八年十二月一日発行